コウノトリ野生復帰検証事業　検証結果の報告

１．今回の検証事業について

（１）検証に至る経緯

・日本初の絶滅動物の再導入事例「コウノトリ野生復帰」の取り組みが、兵庫県豊岡市及びその周辺の地域（以下、「豊岡地域」と表現する。）で展開されている。

・絶滅危惧種（特別天然記念物）の保護から始まった取り組みは、人工増殖による個体の再導入とそれを取り巻く自然・文化環境の再生、そして地域再生へと広がりを見せている。

・その動きが国内外へも拡大しつつある今、取り組みに深く関わる行政機関が共同主体となり、公共政策の観点から現時点における進展プロセスの検証を行うこととした。

（２）検証の目的

・豊岡地域におけるコウノトリ野生復帰の取り組みのさらなる進展に活かす。

・同様の取り組みを進める他地域において、その推進への活用を期待する。

（３）検証体制

【コウノトリ野生復帰検証事業共同主体】

文化庁、農林水産省、国土交通省、環境省、兵庫県・県立コウノトリの郷公園、豊岡市

（事務局：豊岡市）

【コウノトリ野生復帰検証委員会（第三者委員会）】

委員氏名	所　属	分　野
◎涌井　史郎	東京都市大学環境情報学部教授	ランドスケープアーキテクト
○古川　　彰	関西学院大学社会学部教授	環境社会学
永田　尚志	新潟大学超域学術院　朱鷺・自然再生学研究センター准教授	動物生態学
藤栄　　剛	滋賀大学環境総合研究センター准教授	農業経済学、経済政策
大山由美子	（株）丹青研究所取締役	エコミュージアム

（◎委員長、○副委員長）

【ワーキング】

株式会社　建設環境研究所

２．検証の手法と特徴について

（１）検証のプロセス

①取り組みの背景の整理・・・豊岡地域の地域コミュニティの特徴を整理。

②取り組みの実績の整理・・・代表分野（河川、農業、地域社会）の取り組みの経緯と実績を整理。また、共同主体による自己点検を行い、課題と今後の方向性も整理。

③取り組みの分析　　・・・取り組みの「広がり・つながり」の要点を抽出。

④取り組みの進捗評価　・・・「愛知目標」※と対照して、進捗を客観的に評価。

▽

⑤ひょうご豊岡モデルのまとめ・・・取り組みのポイントを整理。

⑥さらなる進展に向けた提言・・・検証委員会からの提言。

※愛知目標
生物多様性条約COP10
（2010.10愛知）で採択

（２）今回の検証の特徴（委員長指摘）

・これだけの機関が共同で第三者委員会を設置し、自らの取り組みを検証したことは国際的にも珍しい。同様の意欲ある地域にモデルとして提供しようとする試みも未来志向である。

・「生態系」と「人間社会」のシステムの議論が分立せず統合化された。また、科学と行政と市民の三者の関係も分立ではなく統合化された点に今回の作業の価値がある。

・心の分野に踏み込み、社会に起きた化学反応やそれに伴う共感の連鎖を定量的に論証する手法が試みられた。こういうリポートの中で「心」を真正面から取り上げたものはない。

・「生物多様性を含む自然の保全と、あるべき社会像を一致させる」という表現はままあるが、その具体的な手法や成果、そこに起きた科学反応を、文学的な表現ではなく論証的な視点でまとめたのはこれまでにないことである。

３．検証結果の概要について

（１）ひょうご豊岡モデルのまとめ

取り組みの整理・分析から得られたモデル的要素の抽出

①豊岡地域における取り組みとは

公共政策の観点からコウノトリ野生復帰の取り組みを総括した「ひょうご豊岡モデル」は、次のように表現された。

ひょうご豊岡モデル

地方における 自然財を活かした持続可能な地域づくりモデル

「ふるさとで生きる」という覚悟と決意のもと、
その地の自然と文化をすべての基盤にしながら、
持続可能で経済活力もある「安らげる暮らしぶり」と「心の豊かさ」の双方を手にするために、
コウノトリを象徴として、
自然共生を政策に位置づけた地域づくりモデル。

心の動きを推進力とした「共感の連鎖」誘発のモデル

偶然と必然、双方によるかく乱要素を触媒に、
公共政策が関わりながら社会に良質な化学反応を生み出し、
人々の心にある「命への共感」（バイオフィリア※）と
「郷土愛」（トポフィリア※）を基軸とした共感の連鎖を誘発しながら
取り組みを拡大してきた連鎖の推進モデル。

「科学」と「行政」と「地域社会」の連携モデル

「コウノトリの再生」と「地域の再生」を結びつけることで、
コウノトリに係る科学を基盤に、
「地域づくり」という行政目標のもとで多様な主体がそれぞれの役割を果たしつつ、
住民の思いを実現していく連携モデル。

※バイオフィリア：生物・自然への親和性（エドワード・ウィルソン等が提唱）
トポフィリア　：場所への愛（イーフー・トゥアンが提唱）

【解説】

・コウノトリは特別天然記念物であり、文化財である。豊岡地域では、その再生の過程を通じて、生き物と地域の文化が密接不可分な関係にあると捉え、生物多様性の保全と地域再生・地域活性の両立によって持続可能な地域づくりを目指してきた。

・地域に密着した県立大学併設の研究機関を設けることで、科学を基盤として取り組みを推進し、「共感」をキーワードに科学、行政、地域社会が相互に連携するシステムを設計してきた。

・地域の人々の「この土地で暮らし続ける」という覚悟と決意の上に成り立った取り組みであり、災害さえもより良い地域づくりの契機として活かしてきた。

・コウノトリ野生復帰が象徴する「自然共生」の中に地域の豊かさを見出し、市民の地域に対する誇りとしてきた。

・取り組みへの共感は豊岡地域内外の企業・産業群にも波及し、農業を含めた地域の経済的持続性にも貢献する方法を得ることにつながった。

▽

これらは、地域の豊さに対する価値観を「単なる量的な拡大」から「質的な充実」へと転換しなければなし得ないことであり、「成長」から「成熟」への転換の実践である。人口減少社会が到来したわが国にあって、地方が目指すべき一つのかたちと言える。

キーワード

成長から成熟へ。地域の自然と文化に目を向けた「成熟戦略」

②取り組みのポイント　～さらに深めるために、他地域に広げるために～

代表分野（河川・農業・地域社会）における取り組みの広がり・つながりを「共感」の視点から分析し、抽出されたポイントは以下のとおり。

これらは、今後他の地域等において新たな取り組みを行う際にも参考にできるとされた。

取り組みの５つのポイント

1. 社会的な潮流を受け止めて、積極的に活用・展開
2. 科学・行政・地域社会の連携の体制設計
3. プロセスの設計 →
4. 偶発的な自然現象をも推進要因に転換・活用
5. 地域の伝統的コミュニティの理解

展開の４つのプロセス

1. 気付きのプロセス
2. 将来像の共有プロセス
3. 行動への移行プロセス
4. 共感の連鎖プロセス

キーワード　**心への働きかけ、共感の連鎖**

（２）さらなる進展に向けた検証委員会からの提言

①これまでの取り組みに関する総論

取り組みへの評価

・厳しい自然現象・自然環境と共存してきた文化・歴史を持つ地域性を反映した関係主体の強力な意志のもとで、「この土地で生きていく」という覚悟と決意を持つ人々が、地域の誇りであるコウノトリをシンボルとした将来像「コウノトリもすめる環境づくり」を共有し、各主体がそれに向けた努力を続けている。これは、**地方の衰退が問題となっている昨今、地域の生存戦略として参考になるものである。**

・日本は少子高齢化社会を迎え、都市部への人口集中が加速している。そのような中で地方は、社会資本整備による成長戦略から、自然資本の保全・再生による成熟戦略への転換期にある。

・成熟戦略をとるにしてもその道程は簡単ではなく、多くの人的エネルギーとコストを要するが、何より大事な条件は、「この土地で生きていく」という個人としての、そしてコミュニティとしての覚悟と決意であり、人々の郷土愛と誇り・希望の持てる将来像の共有が地域の成熟への一歩となる。

・その選択が新たな幸福となり、人口減少社会を地方が乗り越えて生き残っていくことにつながっていくのではないか。それはひいては日本のこれからの国づくりにもつながることである。

・**ひょうご豊岡モデルは、グローバリズムの中にあって地方が自らの内発的な力で逆境を乗り越えようとする、大きな成果をあげた地域としての実証モデルである。**

②更なる進展に向けた課題と留意ポイント

取り組みの課題

・人間社会への影響

野生動物と人々との生活・社会の距離が近づくことによる影響等の可能性。

→関係主体が連携して課題を共有し、地域社会に適切な情報を発信していく必要あり。

・コウノトリが豊岡地域外に移動することに対する影響・責任

国内外に対する情報の発信・集約。また、遺伝的劣化を防ぐための状況把握が必要。

→専門研究機関が全国の研究機関・関係主体の全国ネットワーク化を図り、その中心的役割を担うべき。

・コウノトリの生息環境保全・創出と人間社会における短期的利益・利便性や開発等とのトレードオフ※

※トレードオフ：一方を得ようとすると他方を失う関係のこと。

→トレードオフが起こりうることを予め想定した対策、計画、ルールづくりが必要。

・野生復帰による地域づくり進展の現状を見た、市民の理解・誤解

地域づくりの良い側面だけを見て、野生復帰は容易、野生復帰で地域が活性化するという安易な印象を豊岡地域内外に与える恐れ。

→本来「自然と共生する社会」の実現のために実行している取り組みであり、膨大なコスト、労力、年月がかかっていることを発信・周知する必要あり。

・取り組み進展のための既存制度との調整

環境配慮型農業や湿地整備等で、水利権・所有権等の新たな利害関係が発生する恐れ。

→関係機関や既存制度・計画等との調整を丁寧に行う必要あり。

・取り組みの評価のための指標データの継続的収集

→施策を評価でき、かつ経年的に測定されている指標データの収集が必要。

・全国とのブランド競争

全国展開が進捗するにつれ、ブランド価値が相対的に低下していくことも想定。

→品質・ブランドを維持しつつ、さらなる拡大に向け戦略を立てて取り組むべき。

③今後の全国での展開に向けて

・期待が高まる「豊岡地域」の役割

→取り組みが広がる中、調査・研究を先導してきた兵庫県、野生復帰を現場で支援し、地域づくりのシンボルとして展開してきた豊岡市の役割は重要。

・全国ネットワークの必要性とトップランナーとしての役割

→兵庫県や豊岡市は、これから取り組んでいく自治体をネットワーク化し、その幹事役としてＩＰＰＭ※と連携しつつ中心的役割を果たしていくこと、各主体・各行政部局が持つ課題やノウハウをネットワークで共有し、全国的な展開と深化に寄与していくことが求められる。また、コウノトリに係る歴史を持つ地域として、さらなる高みを目指した取り組みを継続させていかなければならない。

・地域コミュニティの成熟による生物多様性の維持

→コウノトリが地域で生息できることは、人と生物を含めた地域の持続性の基本となるもの。単に特別天然記念物や絶滅危惧種の保全という観点で捉えるものではなく、これからのわが国における地域のあり方や、国民一人ひとりの地域コミュニティの中での地域づくりへの関わりのありようを示唆している。

・関係省庁の連携継続の必要性

→取り組みの全国的なネットワーク化、関係省庁の連携と持続的支援が欠かせない。

※ＩＰＰＭ
ニホンコウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル（2013.12 設立）

４．検証結果の公表について

（１）検証報告書

【名称】コウノトリ野生復帰に係る取り組みの広がりの分析と評価
～コウノトリと共生する地域づくりをすすめる「ひょうご豊岡モデル」～

本　編（A4×約 200 ページ）・・・日本語、英語

概要版（A4× 28 ページ）・・・日本語、英語、韓国語、中国語２、フランス語、ドイツ語

【検証（とりまとめ・提言）】コウノトリ野生復帰検証委員会

【発行】コウノトリ野生復帰検証事業共同主体

【作成】株式会社　建設環境研究所

・本編の英語版は９月下旬完成見込み。
・概要版の６ヶ国語は８月中旬完成見込み。

（２）公表媒体等

・概要版冊子・・・コウノトリ未来・国際かいぎ（豊岡市・7 月）、生物多様性条約第 12 回締約国会議（韓国・10 月）などを契機に配付

・本編ＣＤ－Ｒ・・・希望者に配付

・ＷＥＢ（ＰＤＦ）版・・・共同主体ＨＰ等にて公開